



一例報告の有効活用

理事長 百瀬邦和

巻頭言

・・・1

カウント調査

・・・2

道北・道央のタンチョウ

・・・3

今冬のツル情報

・・・4

タンチョウの新常識

・・・5

<連載>鳥と自然と人⑨

・・・6

タンチョウに関係した各種報告

の紹介

・・・7

<活動記録>

・・・8

国後島で発信機を付けられたメスのタンチョウ、ベラヤは今年も無事に越冬し、3月下旬に繁殖地に戻ったようです。このベラヤですが、興味深いことに、冬のねぐらとして雪原（牧草地）を使い続けたのです。タンチョウは凍結しない浅い水の中でねぐらを取るという一般的な説からは明らかに外れています。今冬のベラヤが特別だったのか、あるいは大きな群れに入っていないタンチョウではよくあることなのか、分散をテーマとした越冬適地を検討する際の今後の課題です。

また、道北で初めて繁殖を始めた標識タンチョウの193は、繁殖地の枝幸町から越冬地の音更町～幕別町（十勝川）に移動する際、一度だけですが、大雪山東麓の置戸町（常呂川）で確認されています。この記録は道北のタンチョウが越冬地の十勝地方に移動する際、大雪山の東を迂回して北見市・置戸町付近から峠を越えて陸別町・足寄町・本別町を経由する移動ルートがあることを示唆しているかもしれません。

さらに、本号で紹介したタンチョウの換羽の記録は、中本さん宅を訪れている限られたつがいの記録が、飼育個体の記録等、別の記録と比較することで興味深い意味を持つことを示しています。

北海道のタンチョウが、一部地域では比較的普通の鳥になってきたとはいえ、未だ数の少ない希少な鳥であるために、生態の全容やその変化を知るための記録を大量に集めることは困難です。そんな中で、今回とりあげた例のように、タンチョウのファンから寄せられる観察情報「一例報告」は貴重なものです。これらのような一例報告を積み重ね、それに意味を持たせていくことが、さらなるタンチョウのファンを増やし、そして人とツルが共存する豊かな社会の実現に近づける道であると思っています。

今年も無事にカウント調査が終わりました

富山 奈美

タンチョウ保護研究グループは、毎年冬に北海道に生息する野生タンチョウの総数を調べる調査をおこなっています。

今年も2021年1月22日から2月2日まで、タンチョウ総数カウント調査を行いました。そしてこの調査はタンチョウの生息数だけでなく野生のタンチョウの今を知ることが出来る重要な調査でもあります。

ここ数年北海道では暖冬傾向が続いていましたが、今年は前年以上に暖かく、道東地方は12月中の積雪がない記録的な状況になりました。気温も下がらず、タンチョウも越冬地への移動が遅かったので、調査計画に頭を抱えていましたが、調査直前に気温が下がり、雪が積もって、すべり込みで例年通りに調査が出来た感じです。今回、調査に参加して下さったボランティアの皆様は70名のべ164人でした。本当にありがとうございます。また情報を提供していただいた皆様、ありがとうございます。

今年も1行日記風にカウント調査の様子をご紹介します。

1月22日 音別

寒くもなく暖かで穏やかな日でした。朝からタンチョウが動き回り、給餌場は夕方まで大忙しでした。

1月23-24日 阿寒

阿寒のタンチョウは早朝出勤。集合前に次々と給餌場に集まり、大忙しでした。その分、昼からの動きはゆっくりで、早めに終了しました。

1月25-26日 十勝

調査直前の積雪で道路が埋まり、車で移動できない場所もありましたが、丁寧な観察のおかげで、昨年と同じ位のツルを確認できました。

1月28日 中茶安別

気温は低くないのですが曇り空で日光が

当たらないせいか、じんわりと体にこたえる寒さでした。ツルたちも寒いのか、歩いて給餌場からいなくなるツルも多数。

調査は順調に終わりました。

1月29日 茅沼・標茶

天気は午後から大荒れの予報。当たって欲しくない時にあたります。正午には雪が降り始め、北の方は地吹雪になりました。荒天でもツルたちは現れてくれました。安全を考え調査は早めに終了となりました。

1月30-31日 鶴居

前日の大雪で、釧路市内の除雪が間に合わず、スタッフの集合がバラバラになってしまいましたが、調査は好調。雪の中を我慢していたツルたちが、一気に給餌場に集まったので、2カ所の給餌場とも確認数が多くなりました。翌日の31日は、ツルたちの動きが全く変わり、給餌場の外に散らばりました。

2月1-2日 浜中・根室・中標津

2日とも天候もよく穏やかな調査日和でした。調査範囲が広いので、沢山ツルを見つけたチームもあれば、見つけられなかったチームもあります。どちらも大切な記録です。

今年も非常に良い調査になりました。また来年もお会いし、皆様と一緒に調査できることを楽しみにしております。また、興味を持たれた方、参加をお待ちしています。



1月30日 中雪裡給餌場の様子

2020年 道央・道北のタンチョウの繁殖状況

北海道全域でのタンチョウの繁殖状況調査は2015年以降行われていないため、現在の詳細な状況はわかりませんが、年々、タンチョウの繁殖地は道内各地に広がっています。2020年は、道央で繁殖したタンチョウのニュースが新聞などで話題になりました。また、サロベツ・エコ・ネットワークが「豊富タンチョウ勉強会：宗谷にやってきたタンチョウ」を開催し、道北でのタンチョウの生息状況について報告しています。そこで、タンチョウの新しい繁殖地である道央と道北の話をしたいと思います。

道央地域

えりも町とむかわ町の各1つがいは比較的古くから繁殖が確認されており、2020年にもヒナが確認されました。この2つがい以外に長沼町、千歳市、苫小牧市で各1つがいがヒナ連れ家族で確認されていますので、合計すると道央で5つがいがヒナを育てました。また、厚真町の前年にヒナ1羽連れ家族がいた場所でヒナなしのつがいが確認されていますので、このつがいも含めると6つがいになります。

また、夕張川下流の栗山町で10月にヒナ1羽連れの家族が確認されています。このつがいの繁殖期の情報はありません。既知のつがいが移動してきた可能性もありますが、同地では3年連続してヒナ連れ家族で現れているので、7番目の繁殖つがいの可能性もあると思っています。

道北地域

道北で最初に繁殖が確認されたのは2004年で、豊富町のサロベツ原野中央部で1つがいの営巣が確認されました。



栗山町に現れた家族 RCC撮影

その後、繁殖つがい数が増え、繁殖地はオホーツク海側にも広がってきました。2020年には豊富町、猿払村、浜頓別町、枝幸町で計5家族が確認されました。2015年には稚内市で1つがいの営巣が記録されていますので、もしこのつがいが2020年も繁殖を継続していれば、道北で少なくとも6つがいが繁殖している可能性があります。また、別に繁殖情報不明のつがいも猿払村の5ヶ所、豊富町の3ヶ所で確認されているので、繁殖つがい数はもっと増える可能性があります。また豊富町の南に隣接する幌延町でも単独個体が複数ヶ所で目撃されているとのことなので、道北では今後も繁殖地の拡大が進むことが期待できそうです。

道東のクロツルの続報と今冬のツルの情報

百瀬 邦和

クロツルは今年も標茶町で越冬しました

前号でタンチョウとつがいになったクロツルの話をしましたが、その後の

様子をお伝えします。クロツルは昨年と同様に、秋は中標津で過ごし、冬は標茶町

に移動しました。昨年の越冬場所からは6.5kmほど離れた肉用牛の大規模牧場で、タンチョウの群に混じり越冬しました。この牧場では昨年、国後島で繁殖したベラヤも越冬しました。さて、クロヅルとつがい相手の

タンチョウとのその後の関係が気になりますが、牧場内にいたため残念ながら詳細な行動を観察することが出来ませんでした。

今後もクロヅルの動向を追っていきたいと思います。

北海道に現れた1羽のマナヅル

昨年、タンチョウの調査をしている道北の浜頓別町から、収穫後の畑でデントコーンの落ち穂を食べているタンチョウに混じって1羽のマナヅルがいるとのニュースが入りました。このマナヅルは10月27日から11月下旬までの浜頓別町に滞在したことが確認されています。その後、12月5日に十勝地方の士幌町で2羽のタンチョウと一緒にいるマナヅルが撮影され、北海道新聞で紹介されました。その後しばらく消息が途絶えていました。

ところが、3月11日に日高地方の浦河町でガンの群れの中にある1羽のマナヅルが発見され、当地に4日間滞在していたとの情報をRCC会員の寺屋さんからいただきました。これら3例のマナヅルが同一個体であるという証拠は無いのですが、北海道へのマナヅルの飛来が稀であることを考えると、同じ個体が移動した可能性が高いのではないのでしょうか。それでは冬の3ヶ月間このマナヅルはどこにいたのでしょうか。私は、南下して

本州のどこかまで行っていたのではないかと想像しています。道北から十勝までタンチョウがマナヅルを連れて移動してきたとすれば、今度はこのマナヅルが十勝から本州までタンチョウを案内してくれる可能性も期待できるのではないかと、希望を膨らませています。



浦河町に現れたマナヅル
寺屋圭一氏撮影

韓国から鹿児島県に飛来したタンチョウ

今冬、鹿児島県の出水平野に1羽のタンチョウが飛来し、越冬しました。鹿児島県北西部の出水平野は東アジア随一のツル類の越冬地として有名ですが、その多くはナベヅルやマナヅルで、タンチョウが飛来するのは16年ぶりとのこと。そのため、このタンチョウは人々の注目を集め、数多くの目撃情報が記録されています。

韓国のパーク博士（本会会員）からの情報によると、1羽のタンチョウが釜山近郊の水田地帯に飛来し、12月半ばに南に飛び立ちました。連絡を受けた出水市ツル博物館が調査したところ、同日中に出水平野でタンチョウ1羽が確認されました。その後は一旦宮崎県高鍋市で目撃されたのち、1月から3月半ばまで鹿児島県高江町でマナヅルと一緒に越冬したようです。

高鍋市での越冬の様子は、釧路にゆかりのある薩摩川内市在住の方からも直接情報をいただきました。

大陸で繁殖するタンチョウのほとんどは朝鮮半島中部の非武装地帯付近まで南下し、そこで越冬するため、通常は半島を南下することはありません。しかし、この非武装地帯は、半島の国際的な政治情勢

の影響を受けやすい場所でもあります。保護の観点からもこの越冬地からのタンチョウの分散が強く望まれています。

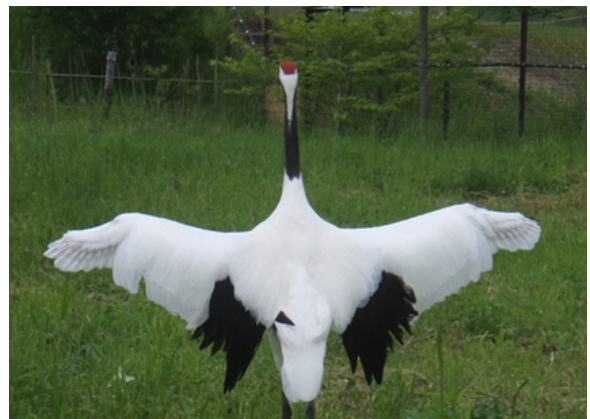
今回のタンチョウの飛来は越冬地分散の足がかりになるかもしれません。

なお、一連の滞在記録の詳細については、現在、出水市ツル博物館が整理中とのことです。

タンチョウの新常識（トリヴィア）

〈第二回：タンチョウの換羽のはなし〉

今回は飛行に必要な風切羽の換羽についてお話しします。換羽とは鳥の羽が抜け代わることを言いますが、そのタイミングは鳥の種類によって全く違います。タンチョウの場合は翼の風切羽がいつぱんに抜け、一度に全部の風切羽を新品に取り替えます。したがって換羽中、つまりは古い羽が抜け落ちて新しい羽が生え揃うまでの約一ヶ月間は飛ぶことができません。また、その間に20枚以上の大きな羽を新しく作り直すのですから、タンチョウにとっては一大事です。

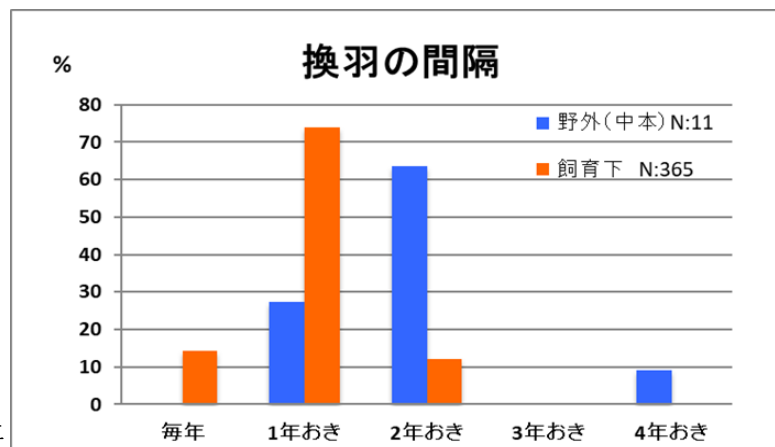


換羽中のタンチョウ
(湿地の神より 2012)

会報38号で釧路市動物園の吉野さんに飼育下の記録を基に、タンチョウの換羽の間隔と時期について寄稿していただきましたが、その中で、「野生個体ではもう少し換羽の間隔が長くなったり、換羽の時期が早かったりするかもしれません」と述べられています。

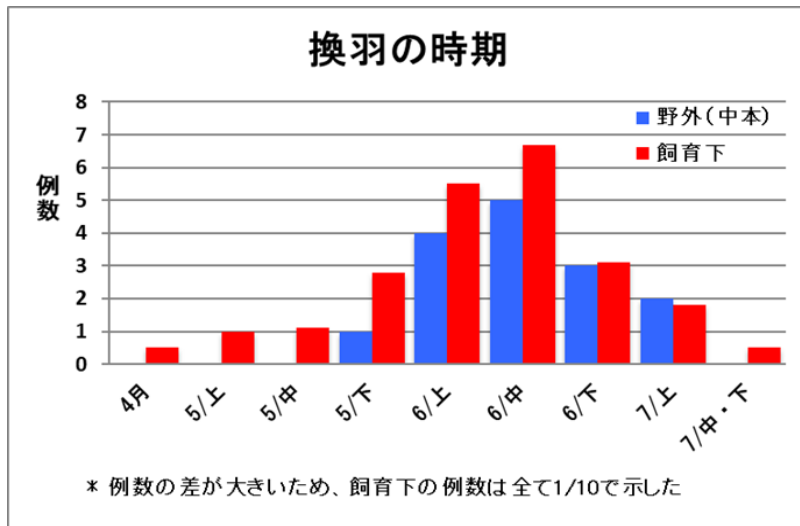
前置きが長くなりましたが、そこで今回のお話です。釧路湿原で15年以上をタンチョウと共に生活している中本さんから、野外で生活しているタンチョウの換羽についての貴重な記録をいただきました。中本さんの記録は主に2004年から2016年に中本家を訪れた2つがいのものです。飼育下ではないため例数は少ないですが、野外生活をしているツルの継続して取られた記録として、大変貴重です。この記録と、飼育下の記録を比べ、換羽の傾向に違いがあるかをみてみました。

まず、換羽の間隔については11回の記録があり、1年おき（2年に一回）が3回、2年おき（3年に一回）が7回、そして4年おき（5年に一回）が一例ありました。1年おきの例は全て同じ個体（オス）の記録です。吉野さんがまとめた記録では356回のうち約7割が1年おきでしたから、中本さんが記録した



ツルたちは飼育下のツルよりも換羽の間隔が長い傾向にあると言えそうです。

次に換羽の時期について、みてみましょう。右は換羽の時期のグラフです。吉野さんのまとめと中本さんの記録はほとんど換羽の時期が一致していて、6月中旬が一番多く、次いで6月初旬、6月下旬となっています。どうやら換羽の時期は野外、飼育下という環境の違いに影響されないと言えそうです。



換羽を記録できる機会は1羽のツルにつき最短で1年に一回、場合によっては2～4年に一回しかありませんので、飼育下のタンチョウだけでなく、野外の個体についても長期にわたる根気強い調査が不可欠です。このように日常の観察記録も積み重ねていくと、タンチョウの生活史を語る大きな記録となります。今回の話は、身近な自然の様子に興味を持って観察し、記録を録り続けることが貴重な資料となる好例と言えるでしょう。

<連載> 鳥と自然と人⑨ バンディングの歴史

石 弘之 (当法人顧問)

数十年前になりますが、山階鳥類研究所のバンディング調査をちょっぴり手伝ったことがあります。かすみ網で捕まえた野鳥に突かれながら、足輪をつける大変さを少しは味わいました。

バンディングはいつ始まったかご存じでしょうか。紀元前218年から201年のポエニ戦争中に、ローマの将校が鳥の脚の周りに糸を結んで、仲間へのメッセージとして使ったというのが最初の記録だそうです。ヨーロッパの中世には、鷹匠が鳥の所有権をはっきりさせるためにバンドを付けました。フランスのアンリ4世（1553～1610年）がバンドを着けたハヤブサが、王宮から約2000キロ離れたマルタ島で発見されたことがあるそうです。

本格な標識調査は、1920年に米国で「連邦鳥類標識調査事務所」が設立されてはじまりました。現在は「鳥類標識調査研究所」に引き継がれています。これまで7,700万羽

以上に標識がつけられ、500万件の記録がデータベース化されています。北米で観察される900種以上の鳥類のほとんどの移動が明らかにされました。

なかでも、絶滅危惧種のアメリカシロヅルの復活に貢献したのが特筆されます。これによって、渡りのルートから詳細な保護計画がつくられ個体数も回復しました。また、太平洋のミッドウェー環礁では、1956年にウィズダムと名付けられたメスのコアホウドリに標識が着けられましたが、なんと64年後の昨年11月に抱卵しているのが目撃されました。コアホウドリがこんなに長生きして、しかも繁殖できるなんて誰も知りませんでした。私も彼女にあやかってガンバラなくちゃ。でも繁殖には相手が必要でしたっけ。どなたか……

タンチョウに関係した各種報告の紹介 〈第二回：タンチョウの行動〉

- ・The Evolutionary and Taxonomic Relationships of Cranes as Revealed by their Unison Calls
George William Archibald Ph. D. (1975) Cornell University
- ・越冬給餌場におけるタンチョウ (*Grus japonensis* Müller) の行動生態 胡東宇 (1998)
博士論文：北海道大学大学院地球環境科学研究科 生態環境科学専攻
- ・飼育タンチョウつがいの抱卵活動 古賀 公也 (2000) 阿寒国際ツルセンター紀要 1 :
27-29
- ・飼育オグロヅルの鳴き合い発声 正富 宏之 (2002) 阿寒国際ツルセンター紀要 2 :
22-27
- ・タンチョウの育雛期における親子の音声と行動 小谷 友香 (2002)
卒業論文：帯広畜産大学 畜産環境科 野生動物管理学研究室
- ・鳴き合い音声によるタンチョウ *Grus japonensis* のペア認識の可能性 香川 紘子
(2005) 卒業論文：帯広畜産大学 環境科学科 生態系保護学講座
- ・育雛期におけるタンチョウ *Grus japonensis* の行動パターンの雌雄差 吉村理恵 (2009)
学士論文：北海道教育大学教育学部釧路校 平成20年度
- ・Ritualized signals in the red-crowned crane: how and why do they perform various displays ?
Kohei F. Takeda (2016) Doctoral thesis, Department of Evolutionary Studies
of Biosystems, school of advanced Sciences, SOKENDAI (The Graduate University for
Advanced Studies)
- ・タンチョウ 武田 浩平 (2017) Bird Research News 14 (8) : 1-2
- ・タンチョウのダンスに秘められた暗号~動物行動学による謎解き 武田 浩平 (2017)
Tancho (30) : 3-4
- ・Duet displays within a flock function as a joint resource defence signal in the red-crowned
crane. Kohei F. Takeda & Mariko Hiraiwa-Hasegawa & Nobuyuki Kutsukake (2018)
Behavioral Ecology and Sociobiology 72 : 66
- ・Complexity of mutual communication in animals exemplified by paired dances in the
red-crowned crane. Takeda KF, Kutsukake N. (2018) Japanese Journal of Animal
Psychology (2018) : 1-13
- ・北海道における野生タンチョウの鳴き合い行動の開始年齢に関する観察記録
正富欣之・森竹 祐(2020) 山階鳥類学雑誌 52 (1) : 129-132

〈活動記録〉 (2020年12月~2021年3月)

- 12月2日 会報Tancho 41号 送付
- 12月3日 運営会議 (7名出席)
- 12月14日 釧路湿原自然再生協議会地域づくり小委員会カヌーガイドライングループヒアリング
(於：釧路開建 百瀬K)
- 12月17日 環境省タンチョウ計画評価ワーキンググループに出席 (百瀬K)
- 12月22日 根室振興局農地課と草地更新事業等の件で打ち合わせ
- 12月28日 環境省と釧路湿原広里地区での事業について打ち合わせ (百瀬K、百瀬Y)

- 1月8日 運営会議（7名出席）
- 1月11日 カウント調査勉強会、班長会議
- 1月15日 釧路湿原自然再生協議会 第24回河川環境再生小委員会に出席（井上）
- 1月21日 釧路湿原自然再生協議会 第23回湿原再生小委員会に出席（井上）
- 1月22日～2月2日 カウント調査
- 1月28日 釧路湿原自然再生協議会 第25回土砂流入小委員会に出席（井上）
- 2月12日 釧路湿原自然再生協議会 第19回水循環小委員会に出席（井上）
運営会議（7名出席）
- 2月17日 釧路湿原自然再生協議会 第10回地域づくり
小委員会に出席（百瀬Y）
- 2月19日 釧路湿原自然再生協議会
第36回再生普及小委員会に出席（井上）
- 2月25日 浜中町・霧多布ナショナルトラストと、
カヌー利用に際したタンチョウへの配慮事項
について打ち合わせ（百瀬K）
- 3月1日 第27回釧路湿原自然再生協議会
に出席（百瀬K）
- 3月3日 北海道開発局【横断道釧路市環境検討業務】
検討会に出席（百瀬K）
- 3月5日 運営会議（5名出席）
- 3月9日 環境省 第3回タンチョウ計画評価
ワーキンググループ会議に出席（百瀬K）
- 3月16日 北海道開発局釧路開発建設部より根室道に
関わるタンチョウ調査の報告を受ける（百瀬K）
- 3月17日 環境省タンチョウ保護増殖検討会
に出席（百瀬K、富山、百瀬Y）

タンチョウ保護研究グループでは、タンチョウのファンとして会の活動を支援して下さるサポート会員を広く募集しています。
当法人は「認定特定非営利活動法人」としての資格を得ておりますので、サポート会員の会費、ご寄付は確定申告によって所得税、法人税、相続税等の寄付控除を受けることができます。

皆様の暖かいご支援をお願いいたします。

振込先：郵便振替 02790-8-64849

特定非営利活動法人 タンチョウ保護研究グループ



< 会員 >（3月 24日 現在）

会員数：179名 運営会員：26名、個人サポート会員：153名（卵117、ひな33、若鳥2、成鳥 0、終身 1）

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Forty-second issue Apr. 2021

<表紙写真>

国後島の繁殖地に戻った
タンチョウの家族

撮影者：クナシリ自然保護区
ディミトリー・ソコフ氏

認定特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>